築山（山のようなかたちをした構造物）

様々な大きさの岩を特別に組み合わせてつくった「人工の山」（築山）は、毛越寺の浄土式庭園の調和とデザインにおいて不可欠な要素となっています。

山のような岩の組み合わせは、水（池）の縁から高さ4メートルの高さにせり上がっており、海岸の岩壁を表現していると考えられています。この岩石の構造物は、日本最古の、そして最も重要視されている庭づくりのマニュアルである11世紀の『作庭記』に記載されている石庭（枯山水）のテクニックを用いています。岩や石だけで、山や滝などの自然の風景が作り出されます。

浄土式の庭園は平安時代に人気となった形式で、仏教の楽園（極楽）を地上に再現しようとしたものです。